

教職課程年報の創刊に寄せて

新井邦二郎（学長）

現在、本学では、東京の十条台キャンパスにおいて子ども学部子ども学科が幼稚園教諭（一種免許状）と小学校教諭（一種免許状）の養成を行なっています（このほか保育士の養成も）。また千葉の八千代キャンパスでは、人文学部の日本伝統文化学科が国語の中学校と高校の教諭（一種免許状）、国際言語文化学科が英語の中学校と高校の教諭（一種免許状）の養成を行い、応用心理学部の福祉心理学科が福祉の高校教諭（一種免許状）と特別支援学校教諭（一種免許状；知的障害者、肢体不自由者、病弱者の領域、ただし平成28年度までの入学者）の養成を行っています。かつては、応用心理学部の臨床心理学科が社会の中学教諭（一種免許状）、大学院心理学研究科が公民の高校教諭（専修免許状）の養成を行なっていましたが、現在では行なっていません。

千葉の八千代キャンパスで現在行われている国語、英語、福祉の養成課程も、文部科学省の計画している平成30年度の「新課程の認定」を受けないことに決まりました。したがってこの先、八千代キャンパスの教職課程は無くなることとなります。教職課程の科目である『教育心理学』を埼玉大学、筑波大学、東京成徳大学と長い年月にわたり担当してきた身としても寂しさを禁じ得ません。

東京の十条台キャンパスの子ども学部子ども学科の幼稚園と小学校の教諭の養成は、卒業生の就職も好調であり、活力がみなぎっています。今後さらに、子ども学部の教職課程は充実していくことが期待できると思います。

よく、教育は科学なのか、それとも芸術なのかを問うことがあります。「教育科学」という言葉があるように、教育を科学として扱うことを頭から否定する人はいないと思われまふ。さまざまな教育実践に関するデータを収集し、自然科学ほどの厳密さはないとしても、教育に一定の科学的法則を見出すことは可能と思います。しかし、例えば『教えること』などの本を著した大村はま先生や『島小の女教師』などの本を著した斉藤喜博先生の授業について、科学的に分析・総合して、そこに一定の法則を見出し、その法則どおりに授業をしたとしても、はま先生や喜博先生のような、すぐれた教育実践に至ることは難しいことと思います。教育は、教師の知的な営みのほかに人間性がすどく現れるものであり、教師と生徒や学生との人間関係も大事になってきます。その意味で、すぐれた教育実践は芸術だとも言えると思います。

科学としての側面と芸術としての側面を併せ持つ教育は、実に奥が深いと言わざるを得ません。そのような奥の深い教育実践について交流し合うことは、教育の発展にとって必要不可欠なことであります。こんにち、大学教育も「教育の質の向上」が強く求められるようになってきています。このことは、将来、子どもたちの教育に実際に従事する教師の卵を養成する「教職教育」においては、なおいっそう重要になっていると思います。

本「教職課程年報」は、本学の教職科目を担当する先生方に発刊の労をとってもらいました。教職科目を担当する先生たちやその教育を受ける学生たち、あるいは卒業生たちが、この「教職課程年報」を実践の交流の場として活用することに大いなる期待を寄せるものです。